

苦難の道をたどった日本における *The Innocents Abroad* 受容

平 田 美千子

Synopsis: It is well known, at least in the United States, that Mark Twain established his fame as a professional writer with his first two travel books, *The Innocents Abroad* and *Roughing It*. His literary works have been popular in Japan since their introduction for over a century, but strangely his fame in Japan is based almost entirely on the popularity of his “children’s literature” such as *The Adventures of Tom Sawyer*, *The Prince and the Pauper* and *Adventures of Huckleberry Finn*. Why have Japanese readers not read Twain’s travel books so much as those widely accepted as children’s books? Or why have Japanese scholars and translators not introduced another important aspect of Twain as a travel book writer to the Japanese public in a more positive manner? This paper will mainly treat *The Innocents Abroad* and discuss possible causes of relative difficulty of Japanese acceptance of Twain’s travel writings.

はじめに

少なくともアメリカ国内において、マーク・トウェインが国民的作家としての名声を得る契機となったのは、*The Innocents Abroad* (1869) と *Roughing It* (1872) という二冊の旅行記であることはよく知られている。とくに、一冊目の *The Innocents Abroad* は、出版後わずか一年で売り上げが七万部を超えたほど好評を博した(井川 51)。ところが、日本においては、トウェインは、上記二冊の旅行記の作者としてではなく、*The Adventures of Tom Sawyer* (1876)、*The Prince and the Pauper* (1881)、*Adventures of Huckleberry Finn* (1885) を執筆した「児童文学」の作家と見なされている。トウェイン文学が日本に紹介されたのは、明治後半の世紀末から二十世紀初頭にかけての時代だが、それ以来、*The Innocents Abroad* の初めての完訳本が出版される前年の一九四八年までに、*The*

Adventures of Tom Sawyer は五種類、*The Prince and the Pauper* は二種類、そして *Adventures of Huckleberry Finn* は三種類の翻訳書が出版された。そのあとも複数の翻訳者がそれぞれ新しい翻訳を試みている（石原「占領下」35）。ちなみに *Roughing It* の初めての完訳本が出るのは、一九九八年を待たなければならない。

翻訳書の出版数は、ある程度一般読者の認知度を反映しているものと考えられる。そして、メディアなどの一般的な文脈において、トウェインという作家の名前とともに取り上げられる作品は、ほとんどの場合、単なる児童文学と捉えられがちで、前述の三冊に限られているように思われる。なぜ日本の読者は、児童向けとして紹介される著作ばかりに注目し、トウェインの出世作である旅行記をなおざりにしてきたのだろうか。言い換えれば、なぜ日本の研究者や翻訳者はこれまで、この作家が存分に本領を¹発揮しているジャンルを積極的に紹介してこなかったのだろうか。

こうしたことを考えるきっかけは、『王子と乞食』と『ハック・フィン』、そしてあまりに有名な『赤毛のアン』シリーズの翻訳を手がけた村岡花子のエッセイ集『曲り角のその先に』（2014）をひもといたことにある。村岡は、「小説を読むにしても、一人の作家を読みはじめると、ずっと続けて同じ人の作品を読み尽くすという傾向が私のうちにできあがった。これは今でも同じである」（33）と述べている。『王子と乞食』の原作本を入手した村岡は、「しんそこら面白くてたまらず、二晩かをほとんど眠るのを忘れて読み上げてしまった」（33）のだと言う。そこまで夢中になったのなら、当然トウェインのほかの作品にも興味を覚えたであろうし、その作品を読んで面白ければ、翻訳しようという気になるのではないか。ところがそうはならなかった。村岡は、なぜ上記二冊以外のトウェインの著作、とりわけ、明治時代以降、日本の知識人のあいだでいちばん人気が高かった *The Innocents Abroad* の翻訳を試みなかったのか、という疑問が自然にわき起こってくる（勝浦『今昔』277）。

こうした疑問を解きあかすために、本稿では、トウェインの書いた旅行記の中から、アメリカにおいては国民的な人気を博し、日本においては知識人

によってその価値を認められていた² *The Innocents Abroad* を取り上げ、日本における受容に際してどのような困難が待ち受けていたかについて探ってみたい。日本におけるトウエイン文学の受容史の代表的な先行研究としては、勝浦吉雄、亀井俊介、石原剛各氏の著作があるが、その中で *The Innocents Abroad* の受容に直接言及されている箇所は、さほど多くはない。翻訳書がたくさん出版されている作品が中心的に扱われることは至極当然の話である。しかし、各氏がそうした作品の受容の経緯を分析する際に言及した、当時の日本社会や翻訳者たちが抱えていた諸事情については、*The Innocents Abroad* の受容を考える上で有効なものを見なしたい。

また、作品の受容について議論をするとき、いつの時代の読者を対象にするかを明確にする必要がある。本稿では、トウエイン作品が日本で読まれ始めた明治時代後半の一九〇〇年頃³から、浜田政二郎による *The Innocents Abroad* の初めての完訳『赤毛布外遊記』が出版された一九四九年までの約五十年間を受容史の前半期、第二次大戦終結時から二番目の完訳本『地中海遊覧記』（吉岡栄一、錦織裕之、飯塚英一による共訳）が出版される一九九七年までの半世紀を後半期と捉えることにしたい。三番目で最新の完訳本といえば、勝浦吉雄、勝浦寿美による二〇〇四年出版の共訳『イノセント・アブロード』だが、これは二番目が出版されてからあまり時間がたっていないので、上記の前半期と後半期において、なぜそれぞれ五十年もの間隔ができてしまったのかを考察するのが妥当なアプローチであるように思われる。なお、紙幅の関係上、本稿では、主に前半期における *The Innocents Abroad* の受容に焦点を絞って論を進めてゆきたい。

The Innocents Abroad の最大の魅力は、作家独特の巧みなユーモアで読者の笑いを誘う、その語りの調子にある。その語りによって描きだされる、大衆観光黎明期の欧州と聖地の現実、そして、語り手「トウエイン」を代表とする、当時のアメリカ人旅行者のイノセントぶりと彼らが体現する新世界アメリカの若々しさ、そうした要素が多くの欧米の読者を惹きつけた。ところが、日本の読者にとってはむしろ、まさにこのような特徴が、この作品を受け入れる際の障害となっているのではないか。以下の本論部分において、

この仮説が成立するかどうか検討していく。

I. アメリカ人の描いたイノセントなアメリカ

The Innocents Abroad は、旅先で見聞する事物よりも、アメリカ人旅行者が旧世界において何をどのように感じ、それに対してどう振る舞うのかを描くことに、いちばんの重きを置いている点が特徴⁴であり、それゆえに多くの欧米の読者を獲得することができた。当時のアメリカは、政治、社会制度、科学技術、生産力、生活水準といった面において、欧州に勝るとも劣らぬ国家として成長を遂げ、過去の内戦によって失われかけた自信を取り戻しつつあった。作品には、自らを「罪人たち」と呼ぶ「トウェイン」とその仲間、彼らとしばしば対照的に描かれる「巡礼者たち」ほかからなるクエーカーシティ号の乗客に加えて、旅先で遭遇するアメリカ人旅行者など、新興国アメリカの国民としての自尊心を隠そうとしない「イノセントなアメリカ人」たちが登場する。

「罪人たち」は最も多くの笑いを提供する役割を担っている。トウェインは、旅慣れないアメリカ人がカルチャーショックに遭遇するとどのような反応を見せるのか具体例を挙げながら、コミカルに描写している。欧州をめぐる旅では、「罪人たち」は現地のガイドや店員に翻弄されたり、逆に、とぼけた質問を繰り返してガイドに反撃したりする。そのように時としてアメリカ人のイノセンスを逆手にとった痛快な笑いを巻きおこし、作品の前半部を盛り上げている。

語り手「トウェイン」は、アメリカ人のイノセンスは、ただ笑いを誘うだけではなく、偏った価値観にとらわれずに、物事を率直に理解する機会をもたらしてくれる、その点こそがアメリカの強みであるという信念を抱いている。「トウェイン」は、“[O]ne has no opportunity in America to acquire a critical judgment in art, and [...] I could not hope to become educated in it in Europe in a few short weeks” (*The Innocents Abroad* 237; 以降 IA と略記する) と語り、アメリカ人である自分は、芸術鑑賞の素養がな

く、少しぐらい欧州に滞在しただけでは、巨匠の芸術性を理解できるようになれるはずもない、そう断った上で、レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』を目前にして、“I could not help noticing how superior the copies were to the original, that is, to my inexperienced eye. [...] [T]he copies are always the handsomest. May be the originals were handsome when they were new, but they are not now.” (IA 191) と述べる。ほかの旅行者たちのように、旧世界の芸術を理解できるふりをし、似たり寄ったりの感想を述べるくらいなら、無知である自分を認めるほうがまだましだという姿勢である。Leslie A. Fiedler の言葉を借りると、“Occasionally, of course, Twain moves from echoing the Americans abroad to mocking them, but never for their vulgarity, their grossness of perception, their smug contempt for culture. What stirs his satirical impulse is rather their pretentiousness, their pitiful attempts at culture climbing.” (51) ということになる。「トウェイン」は、欧州の文化におもねる同国人を批判し、アメリカ人のイノセンスを積極的に認めるように促しているのである。

「トウェイン」は、欧州人の文化的洗練度に対抗するようにしてアメリカ人のイノセンスを打ち出したが、ともすると、それは、二十世紀前半頃の一一般的な日本人読者にとっては、作品に対する共感を妨げる障害になったのかもしれない。明治維新以降、日本は、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスといった欧米の列強から知識や技術を貪欲に輸入してきた。特にアメリカは、ペリー来航以来、早くから日本を開国へ導いてきたので、多くの日本人はアメリカの思想や技術を世界の最先端をいく新しいものととらえて積極的に学んできた。しかし、その流れも明治二十年代頃から変化を見せる。共和制という特異な政治形態を持つアメリカを手本にしていたのでは、天皇制の上に成り立つ発展途上の日本国の足下がすくわれるのではないかという懸念が、知識人や政治家のあいだに次第に広まっていったのである。その結果、日本はヨーロッパを手本とする方針に切り替えることになった。*The Innocents Abroad* の受容史を考える上で、そうした歴史的な流れも無視できないように思われる。亀井氏は、当時の日本においては、「『新国』アメリ

カの文明はいつしか軽薄な物質主義の典型とされ、日本の手本とはならないものになった。ヨーロッパ（およびこの意味ではアジアも）の『旧国』は、精神的な『文化』をもつ。それに対してアメリカ流の世界は機械的な『文明』を発達させているにすぎない、といった観念が形成された」（『西洋』137）と指摘している。*The Innocents Abroad* において、「トウェイン」は、ことあるごとに旧世界の保守性や科学技術の遅れを指摘し、アメリカで発達をとげた文明によって生まれた近代性を誇示する。この時代の日本人に、合理的で新しいアメリカ的な価値観よりも、欧州の伝統と洗練に裏打ちされた高度な精神性を好む傾向があったとすれば、いかにもアメリカ的な発想によって書かれた *The Innocents Abroad* に対する一般の読者の好反応を期待するには無理があったのではないだろうか。

さらに、この作品の初の完訳を手がけた浜田は、日本人は「明治初年以來、主として最近まで、イギリスの教養にのっとり、他国の文学もイギリス的な観点から眺めてきた。従って、粗野で矛盾の多い、そして大陸的なマーク・トウェインのような性格には、も一つ好意がもてなかった。（中略）彼の芸術は洗練されてもいないし、細かい神経や、緻密な理性に訴えるものがなく、アメリカ大自然そのものののように、野趣にみち、未熟でさえある」と述べている（『性格』213）。隅々まで人の手が入ったヨーロッパの自然と、ただ荒れ果てただけの聖地の自然に比べると、アメリカの自然はとほうもなく雄大で豊かである。そこには手つかずの原始のままの大自然が広がっており、いわば純粋なイノセンスの姿をとどめているのである。こうした新旧世界の自然についての「トウェイン」の捉え方でさえも、一般の日本人読者にとっては、むしろ、マイナスのイメージを植えつけるものであったのかもしれない。

このように、クエーカーシティ号による周遊旅行の前半の目的地は、日本人が憧れている欧州であるにもかかわらず、作品で書かれているのは欧州の魅力ではなくアメリカ人の旅の様子である。そうした特徴のせいで、*The Innocents Abroad* が一般読者の興味をかき立てる可能性は低いことが予想されたにちがいない。そこに、翻訳と紹介が遅れることになった要因のひとつ

つが潜んでいるのではないだろうか。

II. ユーモアの題材

トウェインは、*The Innocents Abroad* の出版の際、アメリカ東部の「お上品」な読者にも広く受け入れてもらえるように、元々の通信文に周到な編集を施した。その中で最も重要な変更は、通信員「トウェイン」の旅の相棒だった **Mr. Brown** というパーソナリティの削除であろう。**Mr. Brown** はハワイで書かれた通信文以来、いつも「トウェイン」と旅を共にしてきたが、その発言の内容のきわどさ、あくの強さは、アメリカ西部・極西部の読者を大いに沸かせたものの、東海岸の趣味には合わないものだった。そこでトウェインは、**Mr. Brown** を削除し、その性格の一部を「トウェイン」自身やほかの「罪人たち」に反映させることで、ユーモアの表現の質を絶妙に調整してみせたのである。

そうした配慮が功を奏し、*The Innocents Abroad* は、アメリカ東部の気むずかしい読者にも広く受け入れられ、大成功を収めた。けれども、二十世紀初頭の日本の一般読者にとっては、この作品の基調となっているトウェイン独特のユーモアは、受け入れがたい要素だったのではないだろうか。トウェイン受容史の初期について、石原氏は次のように解説している。「アメリカ文学は明治二十年代になってようやく注目され始めるが、耽美的に享受するよりも、実生活や政治活動に直結しそうな教訓や思想性を多分に拡大して受け止められることが多かった。(中略) 思想性や教訓性というよりも、一見、人を食った笑いの方が目に付くトウェインの文学への関心が高まらなかったことはあまりにも当然である」(『日本』28)。

明治二十年から四十年にかけての頃といえば、トウェインはまだ現役の作家であった。石原氏は、いかに英米での人気が絶大であっても、日本においては同時代の作家についての評価は定まらなかったのだろう、と述べている(『日本』28, 39)。また、*The Innocents Abroad* においてトウェインが用いるユーモアには、大まじめに見える言動や描写のなかに風刺の意図が隠さ

れていたり、一般の人ならば感づいていても口に出そうとしないデリケートな話題を正面から取り上げるという特徴がある。当時の日本人には、そうした辛辣な皮肉が効いたユーモアを楽しむ素養が、まだ育っていなかったということも考えられる。このことは、明治維新以降の大きな歴史転換期において日本が軍国主義国家として急速に発展した政治的な背景や、第二次世界大「戦前までの日本近代文学は、私小説や自然主義の強い影響の下、ユーモアの要素は明らかに希薄であった」（石原『日本』96-97）という、その頃の文学的な事情とも深く関わっていることも考え合わせなければならないだろう。

大正時代に入っても、「人を笑わせるのが主意であって、旧世界の尊いあらゆる物に対する彼の軽薄な態度は、却て米国の俄か文明に対する反感を唆る位が落ちだ」とトゥェインを酷評する研究者もおり、わが国におけるトゥェイン文学に対する評価は、肯定的とはいいがたい状況が続いた（勝浦『日本』72）。そうした中、明治三十一年に日本で初めて全体的な翻訳がおこなわれ、その後も異なる翻訳者によって出版されることになる *The Prince and the Pauper* は例外的な作品であると言わなければならない。この作品が、「トゥェイン作品の中では最もスムーズに受容された」のは、例えば性的な要素を一切含めないという、日本独自の児童文学の風潮に反しないものであったからだ（石原『日本』48, 53）。つまり、トゥェインのすべての作品が不評だったわけではないけれど、二十世紀前半の日本におけるトゥェイン文学の受容は、総体的には苦難続きであったと言えるだろう。

The Innocents Abroad においてユーモアの主要な題材となっているのが、「トゥェイン」をはじめとするクエーカーシティ号の旅行者たちが経験する度重なる幻滅である。夢にまで見たパリにおけるひげ剃り、トルコの風呂、東洋風の水ギセル、トルコのコーヒー、アラブの駿馬、それらのいずれもが期待はずれに終わるのである。二十世紀前半の日本人にとって、ヨーロッパは行きたくても行けない遙か遠い憧れの地であった。実際に渡欧したひと、あるいはその人物から土産話を聞いたひとならまだしも、一般読者がこの作品をひもといたとき、登場人物たちが旅先の事物に幻滅する場面ばかり

が繰り返されたら、大切にしてきた夢や憧れが否定されたような嫌な思いをするのではないだろうか。

トウェインたちアメリカ人旅行者が旧世界を旅するうちに経験したさまざまな幻滅の中でもいちばん大きかったものは、各地の市民のあいだに蔓延していた貧困だったように思われる。その証拠に、トウェインは、*The Innocents Abroad* の中で紹介されるほとんどすべての訪問先において、貧困に苦しめられる市民の姿を取り上げている。欧州においては、イタリアにおける貧富の差が最も深刻なように見えた。物乞いがいない都市はないといっても過言でないほど、社会の矛盾によって生み出された貧困はすでに日常の風景と化している。聖地においてもあらゆる街に貧困が蔓延しており、物乞いに悩まされずに通りを歩くことはできない。そうした旧世界の生々しい負の現実を見せつけられてしまうと、誰しも憧れの欧州やエキゾチックな遠い異国を思わせる聖地の趣を楽しむ気分には到底なれないだろう。日本の一般読者にすれば、繰り返される貧困の描写には、受け入れがたいものがあつたにちがいない。

また、この作品においてたびたびほめかされる人種差別の話題も、二十世紀前半の日本の読者には、なじみがなく敬遠される要因となりえたのかもしれない。これは、ほかの作品においてもたびたび指摘されることだが、トウェインは、野蛮さや不衛生さなどのような文明の未発達を象徴するものとして、アメリカ先住民を引き合いに出す傾向がある。そうした言及は、当然のことながら、作家トウェイン自身の「イノセンス」、つまり良識を欠いた思慮のなさを露呈するものとして批判されてきた。この旅行記においても、「トウェイン」は複数回、差別的表現を用いて「インディアン」を例に引いている。語り手のアメリカ先住民に対する姿勢は作品を通して変わることはない。ところが、ヴェネツィアで出会った米国出身のアフリカ系のガイドのことになると、“Negroes are deemed as good as white people, in Venice, and so this man feels no desire to go back to his native land. His judgment is correct.” (IA 241-42) と語っており、ガイド個人の教養のある誠実さに好感を示している。アメリカ先住民とアフリカ系アメリカ人に対

する「トウェイン」の態度は対照的で、『ハック・フィン』において、黒人差別に反抗する主人公を描いたトウェインが、アメリカ先住民に対しては、差別的な態度をのぞかせるのは矛盾そのものであり、興味深いところである。しかし、ここでは、トウェインのアメリカ先住民に対する侮蔑的な言及やアフリカ系のガイドのエピソードが、アメリカが抱える最大の社会問題としての人種差別を読者に想起させずにはおかないことを指摘しておきたい。

佐々木邦といえ、大正時代半ばに『トム・ソーヤー』と『ハック・フィン』の翻訳を手がけ、児童文学として日本に紹介し、ユーモリスト作家としての執筆活動も行っていた人だが、石原氏は、彼について、「人種主義や奴隷制に対するトウェインの風刺に満ちた批判を軽視する傾向があった」と述べたあとで、「このようなマイノリティへの差別という構造は、状況は異なっているとはいえ、当時の日本にも共通した問題であった。(中略)大正デモクラシーと呼ばれる時代は、ちょうど日本でも韓国人や中国人といった少数民族を多く含んだ被差別部落解放運動が盛り上がった時期でもあった」と続けている(『日本』86)。「トウェイン」は旅行中、身体の奇形の障害を抱える人々を数多く目撃し、いささかのためらいもない調子で、そうした人々の人権を脅かすような侮蔑的な言辭を弄している。アメリカ先住民を含めた、社会における少数派の人々に対するこうした「トウェイン」の態度を考えれば、トウェイン自身も「風刺に満ちた批判」の対象となりうる危うさを備えていることを思わずにはいられないが、それはさておき、当時の一般的な日本人読者は、おそらく、少数派に属する人々の記述については、実際のところ、どう反応してよいか分からなかったのではないだろうか。自分たちの社会においてにわかに浮上してきた人権という問題に、まだ取るべき立場を決めかねているときに、「トウェイン」のあまりに露骨な語り方にユーモアを感じとる余裕などあるはずがなかった。

The Innocents Abroad において示唆されている、欧州に対する数々の幻滅や、旧世界全体に広がる貧困、そして少数派に属する人々に対する差別といった内容は、一般の日本人読者にすれば深刻すぎて、とても笑って見過ご

せるようなものではなかったはずである。そう考えると、当時の翻訳者たちがこの作品の翻訳に二の足を踏んだとしても不思議はないように思える。

昭和初期の日本における *The Innocents Abroad* 受容は、苦難続きであった。それは、「昭和初期という時代は、政治、経済上、対外的にも対内的にも逼迫した時代で、大多数の国民は否応無しに眉間にしわを寄せて笑いのない生活を強いられた時代であったことも、トウェインの作品を理解するのに不利に作用する一因であった」という勝浦氏の説明からも読み取れるだろう（『今昔』293）。

III. キリスト教と聖地

二十世紀前半の多くの日本人にとって、*The Innocents Abroad* において見られるユーモアがこめられた題材の中で比較的分かりにくかったと思われるのは、キリスト教とその聖地に関することだったかもしれない。明治時代中期の時点における日本国内のキリスト教信者の数は、プロテスタントが約三万人、カトリックが約四万人⁷であった。当時の日本における人口が約四千万人だったことを考えると、ごく少数でしかない。したがって、一般的な日本人の意識の中では、キリスト教は言うまでもなく、その聖地のことなどなじみがないために、関心も薄かったはずである。

「トウェイン」は、イタリアにおいて初めて真正面から旧世界の社会問題を取り上げる。第二十五章において、カトリック教会に蔓延する腐敗の歴史をたどったあと、教会の財産を没収し、市民に還元する決断をしたイタリア政府を擁護する。「トウェイン」は、キリスト教の教義そのものには言及せず、教会の組織的な腐敗をやり玉に上げているのである。

また、「トウェイン」は、フランスとイタリアの教会において、不自然なほど多くの聖遺物が存在することに強い疑念を抱く。Eric J. Leed が *The Mind of the Traveler: From Gilgamesh to Global Tourism* の中で、聖遺物の複製に関する歴史的経緯を詳細に説明しているが⁸、教会が聖遺物の複製をこしらえることによって信者を欺いてきた長い歴史を旧世界が抱えている

ことは、周知の事実である。「トウェイン」は、そうした欺瞞を見過ごすことができず、そのような虚偽の存在こそが、旧世界における神の不在を証明していることに思い到る。

欧州を出て聖地パレスチナへ向かうと、さらなる幻滅が待ち構えていた。「トウェイン」たちは、聖地における欺瞞の象徴とも言うべき聖墳墓を訪れる。興味深いことに、このエピソードにおいては、「トウェイン」の語りが、痛烈な皮肉を含みつつも、これまでの重々しさを払拭するような、じつにユーモラスな調子になっている。「トウェイン」は、聖墳墓にある「アダム」の前で聖地の旅行案内書の権威である Wm. C. グライムスの言葉を引用しながら、その欺瞞を茶化している。「トウェイン」は、それまでも何度かガイドブックの嘘の最たるものとして、グライムスの本を取り上げているが、ここでは、彼のお気に入りの“Let him who would sneer at my emotion close this volume here, for he will find little to his taste in my journeyings through Holy Land.” (IA 535, 567) という文句を繰り返したあと、辛辣な皮肉をこめて“With all its clap-trap side-shows and unseemly impostures of every kind, it is still grand, reverend, venerable—for a god died there.” (IA 573) と語るのである。

キリスト教と聖地についてあまりよく知らない日本人にとっても、キリスト教や聖地に対するこうした「トウェイン」の姿勢は、「旧世界の尊いあらゆる物に対する彼の軽薄な態度」を印象づけるのに十分であったかもしれない(勝浦『日本』72)。二十世紀前半の日本人のユーモアに対する免疫のなさを考慮すると、作品の後半部分において、怒濤のように押し寄せる「トウェイン」の聖地批判は、世界を二分するほどの巨大な宗教勢力に対する、あまりにも無鉄砲なものであるように思われただろう。

お わ り に

本稿では、二十世紀前半の日本における *The Innocents Abroad* 受容にともなったであろうさまざまな困難について議論をおこなってきた。それ

は、二十世紀前半の考察のほうが後半よりも重要だと考えたからではなく、単純に、受容史の時間軸に沿って取り上げたからにはほかならない。一番目の完訳本が出版されてから二番目が出版されるまでの約五十年間の空白期間についての考察は、今後の研究課題となるが、最後にその展望について少し述べておきたい。

第二次大戦後の占領期の日本において「アメリカ主導による児童文学の民主化の風潮の中で、マーク・トウェインは間違いなく、当時最も積極的に受け入れられたアメリカ作家だった。戦後三年間で十種類ものトウェイン作品の翻訳書が出版され、その数はアメリカ作家の中で最も多い種類数であった」（「占領下」35）と石原氏は述べているが、児童文学とはいえない *The Innocents Abroad* のような作品についても、二十世紀前半に比べると後半においては、受容に必要と思われる読者の素養は向上していったと考えても、無理はないように思われる。

そのため、二十世紀前半の考察でおこなったように、日本人読者の素養を中心に分析しても、おそらく問題解決の糸口は得られないだろう。では、読者が育っているのに、なぜ翻訳がなされなかったのか。現時点で考えられるのは、二十世紀後半の考察においては、研究者あるいは翻訳者側の事情に目を向ける必要があるのではないかということである。*The Innocents Abroad* 特有の文体が、翻訳作業の困難を予想させたので、翻訳者を遠ざける結果になったのではないだろうか、そうした仮説をもとに今後の研究を進めてゆきたいと考えている。

Notes

1 勝浦氏は、浜田による完訳本が出版される前の *The Innocents Abroad* の翻訳に関する動向として、『英語の日本』に掲載された、紀太藤一（明治四十四年（西暦一九一一年）発行第三巻に掲載）、山崎貞（明治四十五年（西暦一九一二年）発行第四巻に掲載）、和多田勉蔵（大正六年（西暦一九一七年）発行第九巻に掲載）、それぞれによる部分的注解と訳を紹介している（『今昔』122-29, 206-8；『日本』57-9, 109）。なかでも山崎貞による訳・注は、非常に丁寧かつ誠実な仕事として高く評価している。氏はまた、当時、トウェインの作品中もっとも人気のあったこの作品の完訳を試みる翻訳者が昭和の時代になるまで出なかったことを「不思議でならない」と述

べている（『今昔』123）。

2 明治四十年（西暦一九〇七年）出版の浅野和郎による『英文学史』の中では、トウエインは「その長技は最もその旅行記にあらわれ…」と、その才能は旅行記執筆において存分に発揮されているという説明がなされている（勝浦『日本』5）。

3 トウエイン作品の日本における初めての完訳は、一八九八年に子ども向け雑誌『少年世界』に連載された、巖谷小波、川田河山人、黒田湖山人の三名による *The Prince and the Pauper* の共訳、「乞食王子」だった（石原『日本』48-50；勝浦『今昔』2）。

4 “*The Innocents Abroad* is a book about touring, not traveling, and that is its strength [. . .] he brilliantly perceived that the originality of his work compared with other books of travel would reside in his paying closer attention to the tourist experience and to tourists themselves than to the places visited. *Innocents Abroad* is a book about the comic adventures of a group of tourists far more than it is about the places they visit.” (Ziff 185; cf. Fiedler 50)

5 MaKeithan xiv; Cox 42；亀井『世界』120；吉田 194を参照。

6 “In one of his letters to Bliss, Mark Twain wrote that the theme of *The Innocents Abroad* was the contrast between what the travelers had expected to see and what they did see on their journey” (Walker 220).

7 亀井『西洋』204を参照。

8 Leed 142-46を参照。

Works Cited

- Cox, James M. *Mark Twain: The Fate of Humor*. Princeton: Princeton UP, 1966.
- Fiedler, Leslie A. “An American Abroad.” *Partisan Review*, XXXIII (1966): 79-90. Rpt. in *Mark Twain Critical Assessments Vol. 3: Critical Essays*. Stuart Huchinson, ed., Mountfield, Eng.: Helm Information, 1993. 39-52.
- Hamada, Masajiro (浜田政二郎). 『マーク・トウエイン—性格と作品—』東京：研究社, 1955.
- . 「略伝と解題」『赤毛布外遊記 下』マーク・トウエイン著／浜田政二郎訳。東京：岩波書店, 1977. 267-84.
- Igawa, Masago (井川眞砂). 「大英帝国植民地への旅—『赤道に沿って』世界を一周するトウエイン」『マーク・トウエイン研究と批評』4 (2005): 30-37.
- Ishihara, Tsuyoshi (石原剛). 「占領下の子どもたちが読んだ『トム・ソーヤ』と『ハック・フィン』」『マーク・トウエイン研究と批評』6 (2007): 34-41.
- . 『マーク・トウエインと日本—変貌するアメリカの象徴』東京：彩流社, 2008.
- Kamei, Shunsuke (亀井俊介). 『西洋が見えてきた頃〈亀井俊介の仕事3〉』東京：

- 南雲堂, 1988.
- . 『マーク・トウェインの世界』 東京：南雲堂, 1995.
- Katsuura, Yoshio (勝浦吉雄). 『日本におけるマーク・トウェイン－概説と文献目録－』 東京：桐原書店, 1979.
- . 『翻訳の今昔』 東京：文化評論出版, 1980.
- Leed, Eric J. *The Mind of the Traveler: From Gilgamesh to Global Tourism*. N. p.: Basic Books, 1991.
- McKeithan, Daniel Morley. Introduction. *Traveling with the Innocents Abroad: Mark Twain's Original Reports from Europe and the Holy Land*. By Mark Twain. Ed. McKeithan. Norman: U of Oklahoma P, 1958. vii-xv.
- Muraoka, Hanako (村岡花子). 『曲り角のその先に』 東京：河出書房新社, 2014.
- Twain, Mark. *The Innocents Abroad*. 1869. Ed. Shelley Fisher Fishkin. *The Oxford Mark Twain*. New York: Oxford UP, 1996.
- Walker, Franclin. *Irreverent Pilgrims: Melville, Browne, and Mark Twain in the Holy Land*. Seattle: U of Washington P, 1974.
- Yoshida, Hiroshige (吉田弘重). 『マーク・トウェイン研究』 東京：南雲堂, 1985.
- Ziff, Larzer. *Return Passages: Great American Travel Writing 1780-1910*. New Haven: Yale UP, 2000.